
my way

優女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

my way

【Nコード】

N2199BA

【作者名】

優女

【あらすじ】

万事屋二人がタイムスリップ!!その場所は…?

銀時たちがそこで見たものとは…?

第1話 自分史は大事でしょ（前書き）

万事屋冠連載小説です。あ、銀さんが「KAMUI終わった」って嘘言ってますけどほっっておいてください

第1話 自分史は大事でしょ

万事屋。

説明は特にいらないよね、皆さん知っての通りですから。

いつもと同じ朝。

小鳥のさえずりが澄んだ空気に馴染んで優しく聞こえる。

「ふあああ〜」

寝巻きの万事屋オーナー、坂田銀時が欠伸をしながら居間へ出てきた。

今日はいつもより少し早く目覚めた。

気持ちのいい朝、と素直に感じた。

「あけましておめでとつございます、って何言ってたんだ。とっくに明けてるつつうの。KAMUIも終わってやっと新しい万事屋冠連載もらったのになんだよこの登場。地味にも程があるつつうの。しかもあるあるネタですよ、できあがってたんだよ。結末は！」

と、一人ブツブツ愚痴を言っていると神楽も居間へ入ってきた。

「朝から一人で何言ってるアルか。恥ずかしいっいたらありゃしない
…」

目を擦る。いかにも眠たそうな態度。

「せーなア。たまには仕事の愚痴を言いたいもんだ」

「仕事の愚痴は家に持ち帰るもんじゃないネ！」

「ハイハイ」と軽く流す銀時。

「もうすぐ新八が来る頃だな」

「ミタさんみたいに時間ちょつきしで来るアルか」

「そこまできつちりしゃねーから」

そう言ってると扉が開く音がした。

「噂をすればアル」

新八が来たのは確かだが、なかなか入ってこない。ミシミシと床が
軋む音が響く。

やっと居間の戸が開いた。

「おはようございます。銀さん、玄関にこんなものが」

ドカツと置いたそれは電子レンジのような機械だった。

「家のレンジはまだ壊れてねーけど。っつーか誰だうちに粗大ゴミ置いたのは！」

怒る銀時の傍ら、神楽は不思議そうに機械を見つめる。

「私の部屋には置けないアルからな。新八の家に持ってたら？」

「いや、うちに置いたら姉上がすぐに壊しちゃっから」

困る三人。机に置かれた謎の機械。

しばらく眺めるだけになる。

「動くのかア？」

銀時が機械のふたに手をかけた。

「銀ちゃん！一応冷や飯持ってきたアル」

「オイオイ、まだモノホンの電子レンジって決まったわけじゃねー
っつて」

「それじゃあこの機械は一体……」

銀時はとつてを握った。
そして開けた。

三人は中を覗いた。

「なんだ、ただの電子レンジじゃないですか」

「ビビらせんなヨ」

「ありきたりなレンジだなあ」

アハハと談笑する三人。

「…アレ、神楽。お前いつの間に着替えた？」

「そういう銀ちゃんこそ、さっきの寝巻きはどうしたネ」

お互い自分の服装を見る。いつもの着流し姿。靴も履いている。

「アハハ、こりゃアレだ、叙述トリックだ。文面ならではの特権だよ」

「凄いアルな」

「なわけあるかアアア!!!」

新八のシャウト。

「周りを見る！！さっきまで僕ら万事屋にいましたよね！？なんでもいきなり草原！？」

「すげーなオイ！叙述トリックも進化したもんだ。これでどこでも行きたい放題だア」

「そつアル！所詮、読者に伝わらない限り自由自在ネ！！」

「そんな読者に分かりづらい小説なんてすぐに打ち切りだアアア！
！分かれよ！！お前らがいの一番に状況を把握しろよ！！」

新八の説教が続く。

「わーったよ。分かるよ、俺だつて大人だもの」

「さすが銀ちゃん大人ネ！！冷静沈着は身に付いてるもんアル」

ここでやつと落ち着いた三人。

やっぱり周りは草原。この広い草原に三人と謎の機械だけがいる。

「…どうしよ、どうやったら戻るんだ！？つーかこの機械のせいだよな！どこでもドアならぬどこでも電子レンジかよ！！」

銀時は機械を持ち上げた。が、とたんに機械は崩れ落ちた。破片がむなしくバラバラと地に落ちて砕ける。

「「「……………」」」

「ふう、処分は終わった。よし、けーるぞ」

「けーるぞじゃねーだろコレエエエ!!完璧に帰れなくなっちゃったよ!!」

「俺が悪いってのか!?俺か!?ああ責めるだけ責めればいいじゃねーか!!俺ア悪くねーからな!!」

「いや、誰も銀さんが悪いなんて言ってますよ!!」

「持ち上げたら崩れ落ちた、それだけのことアル」

なんとか二人に慰められた銀時。

しかし一体ここはどこなのかまったく皆目見当がつかない。

三人は突然の出来事に戸惑いながらも、とりあえず歩くことにした。歩けば誰か人に会えるかもしれない。

「…道だ!」

新八が指を指す。

田舎の田んぼの畦道のようだった。

「ここを歩けばどっかに辿り着くネ」

だが、銀時の様子が少し変だった。

この道、この風景…

「どつしたんですか、銀さん」

「いぢ…」

かぶりを振った。

いやまさか、こんなはずがない。

向こうの方から、誰かの足音がした。

走る足音。

子供たちが向こうから走って来るのが見える。その中に一人、長身の大人がいる。

「やった、人アル！」

新八と神楽もそつちに駆けて行く。だが銀時だけは立ち止まった。

そのシルエットは次第にはっきりと露になる。

「……………嘘だろ？」

長身の人物の正体。

「しよ…松陽…先生」

第2話 1日は挨拶から

目の前にいるのは紛れもない、かつての恩師、松陽先生だ。

「世の中には似た人が三人いる。俺の場合は大泉洋と毛玉、ウン」
「じゃあ目の前にいるのは？」

「銀さん！ありがたいことに家まで案内してくれるそうですよ！」

「よかったアル！これで飢え死には避けられるネ！」

「あっ、そうか」

言われるがままに、新八と神楽に手を引っ張られる。

「こんにちは」

長身の人物は軽く会釈する。

「じつにちは」

「噛んでるし」

へっと笑う神楽。

「私、村塾を開いてます、吉田松陽といます」

松陽と名乗る男はニコツと微笑んだ。

「え、あ、どうも」

モノホンんん！？

「ちょ、このチビ、銀ちゃんにクリソツネ！！生き別れの兄弟アルか！？」

神楽の横にいるのは周りの子供と同じくらいの背丈で、だいたい7歳くらいの銀髪で天パで死んだ魚のような目をした子供がいた。

「本当だ！銀さんにそっくりですね！！」

その少年は不思議なものでも見るように銀時を見つめる。
ひきつった顔の銀時。

「こいつ…もしかして…」

銀時は新八と神楽を強引に引っ張り、数メートル先まで下がった。

「ちょ、何するんですか！」

「お前ら、落ち着いて聞けよ。アレは紛れもねエ、俺だ」

「ええええ！！！！？」

とっさに二人の口を抑える銀時。

「俺たちはどうやらタイムスリップしちまったようだな。あの電子レンジで」

「なるほど、レンジでチンした末がこういうことアルか」

「なんもうまくねーよ！お前らは別にいいかもしれねーが俺の場合、俺があそこにいるからバレねーようにしねーと」

「大丈夫ですつて。あんなに可愛い子供時代の銀さんが大人になったらこうなるなんて誰も思いませんよ」

「レンジでチンした末が今の銀ちゃんネ」

「どういう意味だコノヤロー」

三人は素性がバレないようにと確認し、再び松陽たちの前に戻った。

「すみません、俺たち旅人として、ここら辺のことは何もわからな
い紛いモンでして。ああ、こっちの眼鏡が新八でこっちのチャイナ
が神楽。で」

「銀さん、でしょう?」

「え?あつ、まあ、そうです」

松陽はそれ以上聞かなかった。

「それじゃあ付いて来てください」

万事屋三人は松陽の後を歩いた。

しばらく歩くと村塾が現れた。
懐かしいな、と呟く銀時。

「ちあどござ」

松陽の誘導で、三人は塾とは別の部屋に入った。銀時には見覚えがある部屋だった。思い出したくない記憶もある。

お茶を出した後、松陽も一服した。

「三人はどこから来たんですか？」

「かぶき町アル」

「へえ、そんな遠くから」

銀時はどうも落ち着かない様子。

「銀さんでしたよね」

急に呼ばれてお茶を吹く銀時。

「汚いアルな」

「何動揺してんすか」

「ばっ、ちげーよ。巻き舌なんだよ俺ア」

「猫舌ね」

アハハと笑う四人。硬直していた空気が少し和んだ。

「で、なんでしたっけ」

「あなた、私の教え子にそっくりだなあって」

「だっ、誰にですか！」

またお茶を吹く銀時。

「先生、あつちで高杉君と坂田君が喧嘩してます」

一人の生徒が松陽に報告した。

「すみません、ちょっと空けますね」

そう言つと松陽は部屋をあとにした。

「高杉つてあの鬼兵隊の高杉さんですよね」

「まあ……」

軽く頷く銀時。

「坂田君って銀ちゃんのことアルな。昔から仲悪いアルか」

「せーな」

頭を掻く。

「とにかく早くもとの時代に戻る方法を考えねーと」

「この際銀さんの子供時代を堪能するのも悪くないですね」

「子銀ちゃんなら可愛いアルからな」

ニヤツと何やら企む二人。

「お待たせしました」

襖が開き、松陽が入ってきた。

「喧嘩、大丈夫ですか？」

「ええ、二人ともしょうもないことで喧嘩していて。笑っちゃう話、みかんを取り合っていたんです」

「「ぶっ」」

銀時の顔を見るなり急に笑いだす新八と神楽。

「なんだよ」

照れ隠しする銀時。

「みかんの取り合いだって、可愛いことしてたアルな」

ぐいぐいと腕で銀時をつつく神楽。

「まあまあ神楽ちゃん。銀さんにもこういう時代があるんだよ」

小声で話す二人。

なんだかハブにされている銀時は茶をすすった。

「結果、どうなったんですか？」

新八は尋ねる。

「もちろん、半分こです。でもまだ二人はそっぽ向いたままですけど」

「強情なところは今でも変わらないアルな」

ぷぷつと小癩に笑う。

「すみません、厠借りてもいいですか？」

「はい、どうぞ」

銀時は立ち上がり、襖を開けて部屋から出ていこうとした。

「あの、場所分かります？」

松陽は呼び止めた。

銀時はうつすら厠の場所を覚えていたが、ここでは不自然だ。

「あっ、どこですか？」

ヤベツと思い、足を止めた。

「突き当たりを右に」

松陽は優しく笑うだけであった。

銀時がいなくなったあと、松陽は新八と神楽に話し出した。

「なんだか、彼を見てると安心しますね。不思議ですけど」

「銀ちゃんアルか？まったく安心できないネ。万年金欠で家計は火の車ネ」

「給料もロクに払わないし、ちゃらんぼらんだし。ホント銀さんには参っちゃいますよ」

二人は松陽がかつての銀時の恩師だということは知っていた。銀時の親でもあるような松陽に、今の銀時を知って欲しかったのだ。

「二人は彼の…部下なんですか？」

「部下ってというか、いつも一緒にいるんで。まあ家族みたいなもんです」

「貧乏家族アル」

「そうですか」

松陽は安堵したかのように笑った。

「やっぱり聞かなくても俺の記憶は正しかった」

厠を済ませ、部屋に戻る途中、銀時は足を止めた。さつき高杉と喧嘩をしたという自分が、外の渡り廊下に座っていた。銀時は子供の自分の横に座った。自分に話しかけるなんて可笑しいと感じたが、何故かほっっておけなかったのだ。

「…何してんだ、こんなところで」

「ほっとけよ」

「可愛くねー奴」

自分だが相手は子供だ。何年も前のことだし、覚えてるはずもない。

「喧嘩したの、まだ根に持ってたんのか。その気持ちよく分かるよ。アイツにだけは負けたくねーって」

「…同じ髪」

突然、子銀時は銀時の頭を指差した。

「あつ、ああ。可愛いそうだろう？天然パーマ。いつかストレートにしてやるって意気込んでるけど」

「…似合ってる」

思いもよらない言葉に戸惑う。

「アンタも似合ってるぜ」

子銀時は笑った。

「お前、名前は？」

ここで坂田銀時です、なんて言ったら驚いてしまう。

「俺は万事屋銀さんだ。頼めばなんでもしてやるよ」

「へえ」

また子銀時は可笑しく笑った。

なんだか自分に笑われるなんて複雑……。と嬉しくも悲しくなった。

「……つーか、俺ってこんなに話す子だったっけ」

子銀時を見つめる。

「おいチビ、お前もつと笑えよ？んでもつと先生のお手伝いもしろ。勉強もして、いい大人になれよ」

「チビじゃねーよ。ちゃんと銀時って名前あんだ」

そう言うと子銀時は他の子供たちがいる方へ駆けて行った。

やれやれと一息つくくと、銀時は部屋へ戻った。

第3話 親心子知らず

部屋に戻ると松陽は笑って迎えてくれた。あの頃と何も変わらないその笑顔。銀時は顔には出さなかったが、無性に悲しくなった。

本当のことを話して、松陽に聞きたいことがたくさんあるのに、あの時言えなかったことだつてたくさんあるのに、それが言えない状況に悔しさを感じた。だが、本当のことを言ったところで相手を混乱させるだけだ。信じてもらえるはずもない。

「遅かったじゃないですか」

「ウンコか」

「文頭早々汚ねーこと言うな。戻る途中あのさっき喧嘩してた高杉君じゃない方のガキと少し駄弁つてただけよ」

高杉君じゃない方のガキつて…。言い方に不満を感じたが言いにくい訳もわかる。

「銀時ですか？」

松陽に聞かれ、ビクツとする銀時。

「ああ、確かそう言ってたなア」

「お話されたんですか」

「まあ、軽く…ですけど。喧嘩はよくねーよ、潔く引き下がれって
言っただけです」

松陽はクスツと笑った。銀時は何かいけなかったかと焦るが松陽の
表情から迷惑だと感じなかった。

「おもしろい人ですね、銀さんって」

「え、そうっすか？」

「ダメアル。銀ちゃんすぐ浮かれるから、そんな誉め言葉言ったら
天狗になるだけネ」

「いや、可笑しい人ってこともよ」

「そっちか」

「オイオイ、そりゃねーだろ！なあ先生！」

あつと思わず口を止める。松陽もいきなり銀時から先生と呼ばれ、
戸惑った。

「あつ、ねえ？吉田さん！」

「そうですね」

とっさに言い換える銀時。その場の空気は一変、また硬直してしま

った。

「あ、私次の授業があるので行きますね。ゆっくりしてってください」

松陽は笑顔を見せると部屋をあとにした。

「よく笑う人アルな」

ハアツと羽根を伸ばすかのように背伸びする銀時。やっと何かに解放された気持ちになった。

「まったく、いつも笑ってばっかで勘の鋭い先生だったぜ」

「銀さん、こんなこと言うのもアレですけど…どうして吉田さんは今いないんですか？」

この世にはいないということを知っていた。だが、どうして亡くなったのかは聞かされていない。

「そーさなア…」

銀時は少し黙ったあと、また口を開いた。

「疲れたんじゃないの？」

「え…」

その意味がさっぱり分からなかった。

「人生にアルか」

「そんなの知らねーよ」

銀時は机に肘をついた。

まさか、またあの人に会えるなんて。

言葉を交わすことができるなんて。

まるで夢みたいだ。

話したい伝えたいことがいっぱいある。

なのに、言えない。

「ん？アレ…」

神楽が縁側の方を指差した。

「あつ…」

長髪を後ろに一つに結ってある少年が通った。

「ありゃ…ツラだ」

「えええええ！？桂さん！？あの、桂さんん！？」

新八が絶句する。

「マジアルか！！賢そうに見えるネ！！」

「あん時だけな。確かに成績良かった気がすつけど」

「どう踏み間違えたら今のような桂さんになるんですか」

「謎の宇宙人飼って古い考え方を持つとああなる。取説を読みすぎるタイプだな」

鼻をほじる銀時。

「なんですか、その例え…」

銀時と新八が話してる間、神楽は席を立った。

「おいヅラあ、言つとくけどお前大きくなったらロクな大人にならないネ。電波バカとか呼ばれてるネ」

子供の桂は不思議そうに神楽を見る。

「何言つてんだバカ！鵜呑みにしたらどうすんだ！！」

パソコンと頭を殴る銀時。

「なんですか。もうすぐ授業始まるので」

軽蔑の眼差しで銀時と神楽を見つめる。

「……」

子供桂は一礼するとそのまま歩き出した。

「おいイイイ！！立場逆転してんじゃんか！！何子供にバカにされてんだ！！」

「どうすつ転んだら今のようなヅラになんのか不思議でしょーがね
エ」

神楽も銀時に並んで頷く。

「とにかく、これからどうしますか？ここにいたって何も変わりませんよ」

「んなこと分かってるよ。でも何も手がかりがねーんだ」

銀時は再び畳に座った。

「迷惑なだけアルか」

「そーだろ」

考え込む三人。

「壊れたあの機械、直せば元に戻れるのかも…。だってアレ、銀さんがふたを開けた瞬間タイムスリップしたんですから、またふたを開けたら戻れるんじゃないですか？」

なるほど、と腕組みをする。

「でも肝心の電子レンジがないネ」

「最初にいたあの場所まで戻るのも無理だろうな。方角だってあやふやなんだしょ」

「そんな…」

また沈黙が続く。

ここにいたら松陽は戻ってくる。

「ハア…」

銀時はため息をついた。

「わりい、お前からここにいろ。スグに戻って来るから」

「え、どこに行くんですか？」

「いいから」

はぐらかすと銀時は部屋を出ていった。松陽と反対の廊下を歩く。

少し歩くと剣術を覚えるために使った道場の入り口があった。

「…懐かしいな」

銀時は一礼すると道場の中に入った。

綺麗に磨かれた床に、生徒たちが着用する胴着やら竹刀やらお面やらが綺麗に並んでいた。

袴には松陽が一つ一つ手縫いしてある名前の刺繍が施されている。

その中に、“坂田銀時”と丁寧に縫われてある袴もあった。その横には“高杉晋助”、“桂小太郎”の刺繍が入った袴が並ぶ。

「小せーな」

フツと小バカにしたように笑う。

誰もいない道場。

所々、思い出が詰まっている。

あの頃の自分はこんな些細なことも、コレとして見ようとしてもしねーのな。

当たり前か、ガキだもの。

死ぬと分かっていたのなら、もっとたくさんしごいてもらえばよかった。ご教授してもらえばよかった…。あとになって後悔ばかりが頭を過る。

「何してんの？」

その一言に体を向ける。そこには子供の銀時、桂、高杉の三人が突っ立っていた。

「今から自主練の時間だから、どいてもらえますか」

桂の一言で正気に戻る銀時。

「あ、すまねーな」

三人は胴着を身に付け、竹刀を取る。

銀時は隅に寄り、三人の自主練とやらを見ることにした。

そーいや、三人でよくやったわ。と懐かしむ。

「んじゃ最初は銀時とツラからな。俺は審判する」

「ツラじゃない桂だ！ちゃんと判定しろよ高杉」

「はい、それじゃ構えて」

銀時はそのなあなあなやり取りを見てられなくなり、高杉の横に来た。

「なっ、なんですか」

「まず根本的にお前ら二人とも竹刀の構え方が違う。もっとこう、脇を締めて」

銀時が竹刀を握る真似をすると、子銀時と桂もそれを見まねする。

「うし、それに竹刀上げすぎだ。もっと下に下ろせ。相手の顔が見えねーだろ？これじゃ相手がどんな表情かわかんねエ。相手の心を探るのも大切だぞ」

二人は言われた通り、竹刀を下げた。

「よし、構えて。始めっ！」

高杉の合図で始まった。

「少し休憩すつか」

なんだかんだ夢中になり、銀時も子供たちの相手をしてきたくただ

った。

「あんだ、松陽先生の知り合い？」

高杉が尋ねた。

「ん？ああ、そんなところだ」

「名前は？」

「人に名前を聞くときはまず自分から名乗れってんだ」

「それ、松陽先生も言ってた。相手の人に失礼だって」

桂が指摘する。

「高杉晋助です」

照れながらも名前を言う高杉。今の高杉とは全然違いすぎて銀時は思わず吹いてしまった。

「なっなんだよー！」

「いや、高杉君、ね。俺は万事屋銀さんだ。頼めばなんでもやる万事屋やってんだ」

「銀時と名前似てるな」

だって俺も銀時だものオオオ！！って思わず突っ込みたくなるが抑

えた。

「桂小太郎です」

「ツラ…じゃなくて桂君、ね」

「…もう面倒くさいから兄^{あん}ちゃんでもいい？」

子銀時が聞いた。

「いいんじゃない？だってなんか銀時に似てるし」

「それ俺も思った。この人本当に銀時のお兄さんじゃないのか？」

そう二人に言われ、何も言えなくなる銀時。

「違うでしょ。だって俺、こんなに間抜け面か？」

子銀時は銀時に指差す。

「んだとこのガキ！」

一緒になって、子供たちとワイワイする。剣も筋もまだまだが、今に繋がる型はある。繋がらなくなってしまった部分も多くなってしまうが。

「やっぱりガキだな…」

そう呟く銀時。

「ガキと一緒にになって遊ぶ大人もどうかと思っけどね」
子銀時に聞かれたのだった。

「ガキはガキらしくしてればいいんだよ」
コツンと一発、頭を叩いた。

「明日も練習付き合ってよ」

「お願いします」
そう子供たちに言われた。

「明日か…」

銀時は三人を置いて背を向けた。

「考えとくよ」

…もとの時代に帰れなかったら。
俺は、一生ここにいるのか!?

早く戻る方法を見つけねーと!!!

銀時ははや歩きで道場をあとにした。

第4話 携帯の充電って気になる

「オイ、今までどこに行ってたアルか」

「スグに戻って来るって言ってたじゃないすか」

やはり部屋に戻るとまず怒られるのは予想していた。

「途中でコンタクト落としちゃって」

「ウソつくんじゃないよ!!」

誤魔化すにも新八と神楽には通用しない。とりあえずザツとさつきまでのことを話した。

「…銀さんは、その三人を見てどう思ったんですか？今じゃ高杉さんにいたっては縁を切ったような感じなんですけど」

「別に何とも感じねーよ。ただ、懐かしかった。そんだけのことだ言葉に詰まる新八。」

ここにいつまでもいるわけにはいかない、むしろいてはいけなさと感じた。

未来の人間が、過去を変えるなんて大層なことをしてはいけない。他人が口出しするようなマネはダメだと銀時もあった。

「すみません、お待たせしました」

スツと襖が開き、松陽が入ってきた。

「あの、銀さん。さっきは子供たちの稽古に付き合って頂き、ありがとうございました。子供たちも喜んでましたよ」

笑顔の松陽。

「そ、そんなア。ちょっと見てただけです」

照れているのか、手を頭の後ろにやる。

「そつえば…」

松陽は何か思い出したかのように言った。そしてある物を取り出した。

「あっ」

それは銀時の木刀だった。

「厠に置きっぱなしでしたよ」

「すみません…」

照れ混じりに木刀を受け取る。

「この柄の部分の洞爺湖って、どういう意味ですか？」

絶対聞くと思ってた質問。

ああ、その木刀は通販で買って、柄の部分に文字を入れてくれるってサーブスがあったから原作者の地元になんで洞爺湖を入れたんですよオ。別に俺としてはこだわらないんですけどねエ　てへぺろ

なんて言えるかアアア！！っか最後の何？どこがてへぺろ！？流
行に乗っかるうとしてどうでもいいところで使っなよペテン師イ
イ！！

心の中でシャウトする銀時。

…言えない。剣を教えてくれた先生に、こんなこと死んでも言えね
エ！！

銀時はゴホンと咳払いした。

「あのですね、この木刀はと、洞爺湖の仙人にもらっ…」

「この木刀、通販で買ったアルよ。こないだカレー溢して新しい
のを注文してたアル！」

言いかげのところで神楽が大力ミングアウト。

「銀さん！？それ修学旅行で買ったとか言ってますでした！？い
や、でも何本か折れてるし、実際洞爺湖の仙人って名乗るオッサン

もいたわけだし……」

新八にいたってはこんがらがっている。

「きゃーぐらちゅわはーんん！何で言っかな！？てめっ、約束の三百円はパーだかなー！」

「だって本当のことアル。嘘は泥棒の始まりネ！始まったところで痛い目に遭うのは結局自分アル！」

なんか上手いことをいう神楽。

「侍の魂、通販で買うんだ、この人」

「俺アね、真剣は持たない主義でね、血を見ると吐きそうになっちゃうから。こないだもね、善意で献血行ったんだけどね、間違えて注射器に溜まった血を見たら気絶しちゃってね、もう大変だったんだよ」

嘘が下手すぎて新八と神楽は軽蔑の眼差しで銀時を見る。

「本当だかなー！」

焦り、銀時は冷や汗でびっしょりびしょだった。

松陽は三人のやり取りを声に出して笑っていた。

銀時は驚いた。

松陽はよく笑顔を見せる人だった。だけど、こんなに声を出して笑

ったところなんて、見たことがなかった。

「本当に、面白いですね。三人は」

「銀ちゃんがバカなだけアル」

「オメーもだろが」

こんなグダグダぶりを正直、先生に見せたくないと思っていたが松陽の笑った顔を見て、安堵した。

「でも、銀さんは真剣を持たないなんて変わってますね」

「そ、そつすか？」

今の時代じゃ真剣帯刀してんのは幕府の人間か攘夷浪士ぐらいだしな、と思った。

そう喋っているうちに、日は暮れかけていた。

松陽の厚意により、泊まることになった。

布団を敷きながら、まさかまたここで眠れるなんてな、と考えていた。

「先生、なんでコイツらと一緒にの部屋なの？」

松陽の袖を引つ張り、駄々をこねる子銀時。

「チビがいい度胸アル。本当は一緒に寝てほしいくせに」

「お前もチビだろ！」

「フン、頭一個分は違うネ」

布団を敷く最中、神楽と子銀時は何やらもめていた。

「ガキはガキなりに可愛い態度取るがいいネ。ほら、神楽お姉ちゃんと一緒に寝てやるネ」

「やめろ！ガキ扱いすんな！！」

「ガキネ！」

神楽は子銀時を追い回していた。

「仲いいですね」

「なんか複雑……」

傍ら、銀時と新八はシーツを敷いていた。

寝巻きは松陽の家にある物を適当に拝借した。

「なんか、銀時と一緒にしちゃってすみません。部屋数がないもので…」

松陽が襖から顔を覗かせた。

「いえ、全然大丈夫です。むしろありがたいですよ」

新八が丁寧に言う。

「ゆっくりしてってくださいね」

そう言うと襖を閉めた。

夜中になっても、神楽と子銀時は騒いでいた。枕投げやら何やらでついには新八も巻き沿いに遭い、一緒になって騒いでいた。

「うるせーなア」

おちおち寝ていられなくなった銀時は、風にも当たろうかと部屋を出た。

月が美しく映えていた。

第5話 月は

月明かりが縁側を照らしている。

なんだか懐かしい匂いのする寝巻きの着流し。

銀時は欠伸をしながらミシミシと軋む音を鳴り響かせながら、縁側に出た。

夜空にぽっかり浮いている月をぼーっと見ながら、腰を下ろした。

妙な気持ちにそれはさせてくれた。

時代が移り、色々変わってしまった。

だが、月は変わらずただ地を照らしている。

銀時は見上げたまま、一息ついた。

変わらずずっとそこにある、簡単なことに思えるが難しい。

すると、向こうから人影が現れた。

「眠れないんですか？」

銀時は見上げる。

声の主は松陽だった。

「…アンタこそ、眠れないんですか」

「そんな感じですよ」

そう言うと、松陽は銀時の隣に腰を下ろした。

このままこの人といると、どうかしてしまいそうだ。

胸が詰まる。

松陽の笑顔が、苦しくなる。

銀時は部屋に戻ろうかと思い、何かしら理由をつけて言おうかと思
ったが、松陽の言葉の方が早かった。

「銀時、今あなたは幸せですか？」

「え…」

耳を疑った。

さっきまでは”銀さん”と呼んでいたのに、今、松陽は”銀時”と呼んだのだ。

バレていたか…

「…いつから…」

銀時の質問に答えた。

「初めて出会った時からです」

「そんなに前から…」

松陽はもう一度繰り返した。

「銀時、今あなたは幸せですか？」

胸が張り裂けそうだった。

頭の中が真っ白になる。

「…分かってんなら聞くなってるんだ」

フフツと笑うと松陽は続けた。

「あの二人と一緒にいる銀時を見ると、私もすごく幸せです」

「…そうかよ」

照れ混じりに言う銀時。

「銀時は何も変わってませんね。安心しました。ヤンキーになつてないかとか、犯罪人になつてないかとか」

「どんだけ信用ねーの!？」

あ、と銀時は口を抑えた。

「やっぱりアンタには敵わねーよ」

「何がですか？」

「色々だよ！」

銀時は頭を掻いた。

「すっかり私の背丈も越えて。小太郎も晋助も、大きくなってるんでしょうね」

「たっばだけは立派になつたかな、たっばだけは。いやでも高杉はチビだな」

松陽は笑った。

「二人にも会ってみたいものです」

銀時はぽそりと「そうだな…」と呟いた。

「銀時」

改めて呼んだ。

その声が、懐かしくて返事ができなかった。

「銀時、未来の私はあなたたちのそばにいますか？」

思いもよらない言葉に、ますます何も言えなくなる。

「…そばに、いるんじゃないかねーか？アンタのことだし」

松陽は銀時の頭に手をのせた。

「銀時」

そう言いながら頭を撫でた。

「ちょ、ガキじゃあるめーし」

嫌がる素振りを見せる。

「フフツ、いくつになっても銀時は私の可愛い教え子ですよ」

「あのかなア〜…」

お人好しにもいいところだと思う。

「銀時がそれくらい歳のになったら私はおじいちゃんですかね。どんなおじいちゃんになってるんでしょ」

「ハゲてるんじゃないね」

「それも悪くはないですね」

意外にも反発してこなかった。

「どんな姿であれ、あなたたちの成長を見守ることが、私の務めですから」

松陽のささやかな願いでさえも、途切れてしまう。

あの頃の自分は何もできなかった。

でもすべてを知った今は、

今なら、

まだ間に合うかもしれない。

松陽を守ることができかもしれない。

「先生はよオ、幸せなのか？」

松陽は目を見開いた。

きつと嬉しかったのだろう。

すぐに頬の筋肉が和らいだ。

「幸せですよ。こんなに思われてるんですから」

「そいつアよかった」

銀時も笑みを浮かべる。

この時間がもっと、永遠に続けばいいのに。

「……これからどんな世の中になっていくんでしょうね。ここはまだ大丈夫ですけど、江戸の方ではもう戦争が何年も前から始まってい

るんです」

それが後につたわる攘夷戦争。

この頃は攘夷戦争初期から中期の最中である。戦争の規模はどんどん拡大していった。

都会の者は元服すれば徴兵することは当たり前だった。

国のため、戦うのだ。

「戦争なんか、やる必要ないはずですよ。なんて言ってますけど、誰も私の意見など聞いてくれません。私のやるべきことは、子供たちを護ることですから」

「ちゃんと聞いてるぜ」

松陽は銀時を見た。

「アンタが教えてくれたこと、俺たちはちゃんと聞いていたぜ。ちゃんと届いてる。今でもずっと」

初めて先生の本音を聞いたような気がして、新鮮だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2199ba/>

my way

2012年1月9日06時46分発行